

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：37303

研究種目：基盤研究(C) ( 一般 )

研究期間：2013 ~ 2015

課題番号：25380823

研究課題名 ( 和文 ) 貧困の連鎖を断ち切るための学校、家庭、地域の連携支援システムの構築に関する研究

研究課題名 ( 英文 ) Study on the construction of the school and the home and regional collaboration support system in poverty

研究代表者

大西 良 ( Onishi, Ryo )

長崎国際大学・人間社会学部・講師

研究者番号：10421306

交付決定額 ( 研究期間全体 ) : ( 直接経費 ) 2,700,000 円

研究成果の概要 ( 和文 ) : 貧困に生きる子どもたちが抱える生活課題に対して、SSWerはミクロからマクロレベルにおける多方面での連携機能を担っていた。また「貧困の連鎖」を背景とする子どもの生活課題は、社会的支援ネットワークが大きく関与していることが分かった。さらに、中学生の子をもつ保護者の半数以上が経済的困窮感を抱いて生活していること、また保護者の経済的困窮感が子育てに対する負担感や子どもの学習機会に大きく影響していることなどを明らかにした。

「貧困の連鎖」を断ち切るための学校、家庭、地域の連携支援システムの理論構築を行い、学校、家庭、地域の一体的な連携支援システムの構築に貢献できるものとなった。

研究成果の概要 ( 英文 ) : About the life challenges of poverty of children, SSWer had been responsible for the coordination function of the various fields from the micro level of the macro-level. "Poverty of the chain" to conduct a case study of a child's life the problem to be background, "strength (strength)", "social support network", "vector (direction)", "sustainability (continuity)" It was verified. Performs a theory construction of the school and the home and regional collaboration support system for to break the "poverty of the chain", it became a thing that can contribute to the creation of a unitary coordination support system of the school and the home and community.

研究分野：精神保健福祉

キーワード：貧困 ソーシャルワーク 精神保健福祉 学校、家庭、地域の連携

## 1. 研究開始当初の背景

学齢期の子どもたちが直面する課題は、時代や社会の状況を反映し、様々な形態をとって顕在化してきた。近年では不登校、いじめ、虐待、自殺、非行等の様々な事象が社会問題化しており、これらの背景には「(子どもの) 貧困」あるいは「貧困の連鎖」などの経済的困窮や生活基盤の脆弱さが深く関係しているとの報告がみられる。また経済的に困窮する世帯で育つ子どもは、学力、健康、家庭環境等の様々な側面において不利な立場に立たされることが多く、子ども期の貧困経験が大人になってからの生活や勤労状況にも大きく影響することが、山野(2008)や阿部(2009)などの多くの先行研究で指摘されている。

このような現状を踏まえ、政府もさまざまな対策を講じている。なかでも文部科学省は子どもへの支援策として「スクールカウンセラー等活用事業」、「スクーリング・サポート・ネットワーク事業」、「問題を抱える子ども等の自立支援事業」、「学校・家庭・地域の連携協力推進事業」などの具体的対策を講じている。特に2008(平成20)年度からは「スクールソーシャルワーカー(以下、School Social Workerを略して『SSWer』と記す)活用事業」を新規事業として立ち上げ、社会福祉士等の国家資格を有するSSWerを全国に配置している。この事業の目的は、SSWerによる学校、家庭、地域への積極的な働きかけによって、学校内あるいは学校の枠を超えた関係諸機関との連携を構築し、問題を抱える児童生徒の課題解決を図ることである。すなわち、SSWerには、連携や仲介、ネットワーク、組織化といった間接援助技術、いわゆる“橋渡し”的機能を担うことによって、児童生徒が呈する問題行動や生活課題の解決を図っていくが期待されている。

しかしながら、「貧困の連鎖」を断ち切ることを目指して、SSWerの“橋渡し”的機能を学校、家庭、地域をつなぐ連携ネットワークづくりに応用し、包括的な連携支援システムの構築を目的とした研究はこれまでになく、早急に取り組むべき研究課題であった。

## 2. 研究の目的

本研究では、SSWerの“橋渡し”的機能に焦点を当て、マッピング技法を用いた連携構造のマッピング化や連携機能のスコアリングなどの可視化によって、貧困の負の連鎖を断ち切るために有効な連携支援システムの解明を行い、学校、家庭、地域が一体となって支援する仕組みづくりに向けた実証的研究を実行した。さらに、本研究結果を踏まえて、SSWerによる学校、家庭、地域の連携支援システムの構築に関する理論生成と指針づくりを行うとともに、「貧困の連鎖」を防止するためのガイドラインを提示することを目

的とした。

## 3. 研究の方法

研究期間は3年間とし、各年度において研究課題(小テーマ)を設定して計画的に研究を進めた。1年目(平成25年度)は、SSWerの連携機能に関する実態調査、SSWerの連携構造および連携機能を評価するスケール開発に関する研究を行った。2年目(平成26年度)は、1年目に開発した評価スケールを用いて、SSWerの援助過程における多機関・多職種の連携構造および連携促進(あるいは阻害)要因に関する実証的研究を行った。最終年度の3年目(平成27年度)には、SSWerの連携構造および連携機能に関する量的研究を主とするモデル検証研究を実施し、学校、家庭、地域の連携支援体制の理論構築および指針づくりを行った。

## 4. 研究成果

初年度(平成25年度)は、貧困に生きる子どもへの支援に取り組む複数のSSWerを対象に、個別インタビューおよびグループインタビューを実施することによって、子どもたちが抱える様々な生活課題への具体的な支援方策ならびに支援内容について明らかにした。研究の結果、SSWerは学校や家庭、地域などのミクロからマクロレベルにおける多方面での連携機能を担っており、また連携の「強度(強さ)」、「ベクトル(方向性)」、「持続性(継続性)」の評価の重要性を示唆した。

平成26年度は、「貧困の連鎖」を背景とする子どもの生活課題、特に児童虐待・ネグレクトや不登校等を呈する子どもの事例を対象に、ケーススタディを行って、社会的な支援ネットワークの「強度(強さ)」、「ベクトル(方向性)」、「持続性(継続性)」について検証した。その結果、親子関係において強く激しいネガティブな感情が常態的にみられること、家族内でのストレス(葛藤)が強まることに呼応して、学校での問題行動(行動化)の頻度が増すこと、家庭への支援者の介入によって家族成員間の情緒的關係、特に関係性の「方向」に変化が見られることが示された。このことから、家庭内での葛藤や抑圧された感情が子どもの問題行動として行動化している場合、支援者は子ども本人のみならず家庭全体も支援対象として捉え、両者と日常的な関わりを積み重ねていくことによって、子どもの精神的健康の回復を図っていくことの重要性について論じた。また、虐待的な環境で生きる子どもとかわる際、自尊心の低さや自己肯定感の低下から表出されるネガティブな感情への心理的なケアの必要性についても述べた。さらに、貧困と子育て環境との関係性を明らかにするために、中学生の子をもつ保護者を対象に、郵送調査を実施した。その結果、調査対象者

の経済的困窮感については、「とても困っている」(19.5%)と「困っている」(35.4%)を合わせると、半数以上(54.9%)が経済的困窮感を抱いていた。この経済的困窮感について、家族構成(ふたり親家庭、ひとり親家庭、三世同居の家庭等)別にみると、他に比べてひとり親家庭で経済的困窮感が強い傾向が見られた。また、子育て意識については、経済的困窮感が強い保護者の方が、子育てへの肯定感が低く、逆に負担感や不安感といった感情を強く抱いている傾向が示された(特に負担感については、 $F(2,114)=3.64$ 、有意確率:5%未満であった)。さらに、保護者の経済的困窮感が子どもの学習塾や習い事の数に大きく影響していること( $F(1,82)=9.75$ 、有意確率1%未満であり、経済的困窮感が強い家庭ほど、学習塾や習い事に通わせている機会が少ない傾向にある)が明らかとなった。

平成27年度は初年度と2年目で得られたデータをもとに、学校、家庭、地域の連携支援の構造・機能の分析を行い、SSWerの連携機能を活かした「貧困の連鎖」を断ち切るための学校、家庭、地域の連携支援システムの理論構築を行った。その結果、SSWerによる学校、家庭、地域の連携支援システムの構築に関する理論生成と指針づくりを行うことで、「貧困の連鎖」を断ち切るために必要な条件を提示した。

本研究の成果は、SSWerによる学校、家庭、地域の連携・協働による子ども支援システムに関するモデルを提示し、実践可能性に関する検証研究を行い、1年目および2年目で蓄積された基礎データおよび実践データをもとに、学校、家庭、地域、行政における連携構造および連携機能についての分析を行うとともに、多機関・多職種による効果的な連携支援システムについてのモデル検証を行うことができたことである。

最終的には、客観的データに基づきながら、『学校、家庭、地域、行政の連携・協働による包括的子ども支援システム』の構築に関する理論生成、ならびに現実社会で応用するための指針づくりを行って、貧困の再生産を防止するためのガイドラインを提示することができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

大西良、若者世代を対象とした児童虐待防止啓発に関する基礎的研究、福岡県社会福祉士会研究誌、査読有、第7号、2014

大西良、民生委員・児童委員の子育て支援に関する意識調査、福岡県社会福祉士会研究誌、査読有、第8号、2015

大西良、全英的取り組み「シュア・スタート」とリバプールにおける子どもの貧困対策、世界の児童と母性、査読無、第79巻、2015

大西良、筑後川流域圏における子育て支援に関する基礎的研究～子育て意識に関するアンケート結果より～、筑後川流域圏の総合研究、査読無、第5号、2015

大西良、不適切な養育環境を背景とする長期欠席(不登校)児の家庭内における情緒の関係に関する一考察、長崎国際大学論叢、査読有、第16巻、2016

〔学会発表〕(計8件)

大西良、スクールソーシャルワークにおける精神保健福祉士の役割、第12回日本精神保健福祉士学会学術集会、2013

大西良、大学生による地域での子どもの居場所づくり活動、日本地域福祉学会第28回全国大会、2014

大西良、ソーシャルワーカーと大学生のコラボレーションによる子どもの居場所づくり活動、第13回日本精神保健福祉士学会学術集会、2014

大西良、英国のチルドレンズ・センターにおける子どもの貧困支援活動に関する一考察、日本社会福祉学会第62回秋季大会、2014

大西良、英国リバプールにおける子どもの貧困対策とソーシャルワーク、第14回日本精神保健福祉士学会学術集会、2015

大西良・占部尊士・辻丸秀策、要保護児童対策地域協議会の現状と課題～A県B市での活動事例を中心に～、第13回日本福祉心理学会、2015

大西良・池田博章、中学生の子どもをもつ保護者の経済的困窮感と子育て意識に関する考察、日本社会福祉学会第63回秋季大会、2015

大西良、不適切な養育環境を背景とする長期欠席児の家族内の情緒の関係に関する一考察、第21回日本子ども虐待防止学会、2015

〔図書〕(計1件)

米川和雄編著 大西良分担執筆、スクールソーシャルワーク実践技術、2015、北大路書房 353

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

大西 良 (ONISHI, Ryo)

長崎国際大学・人間社会学部社会福祉学  
科・講師  
研究者番号：10421306